



TITLE:

表紙ほか

AUTHOR(S):

CITATION:

表紙ほか. 研究報告 2006, 20

ISSUE DATE:

2006-11

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/134466>

RIGHT:

研 究 報 告

第 20 号

《記念特集号》

2006

京都大学大学院独文研究室

目 次

第 20 号記念特集

〔インタビュー〕

『研究報告』の誕生 一大川勇先生・奥田敏広先生に聞く―	(i)
-----------------------------	-----

〔特別寄稿〕

『研究報告』の 20 年	松 村 朋 彦	(ix)
刊行の費用をめぐって	片 岡 宜 行	(xi)
「読み合わせ」のこと	廣 川 智 貴	(xiii)

〔論文〕

歴史とフィクションの狭間で― ―ヴォルフラムの「原典言及」をめぐって―	青 木 三 陽	(1)
E.T.A.ホフマンの『新旧の教会音楽』― ―「ロマン主義的なもの」との関連において―	樋 口 梨 々 子	(19)
フロイライン・エンゲルハルト― ―トーマス・マン『魔の山』における女性像と「同性愛」―	伊 藤 白	(33)
ハリー・ハラーの痛む足― ―ヘルマン・ヘッセの『荒野のおおかみ』における身体について―	廣 川 香 織	(55)
文学的ジャズ表象の諸形態― ―ブルーノ・フランクとフェーリクス・デールマン―	池 田 晋 也	(73)
モラリストの革命性― ―ヘルマン・ケステン文学のモラリスト像 その三―	武 田 良 材	(93)

〔書評・文献紹介〕

Manfred Engel und Dieter Lamping (Hrsg.): Franz Kafka und die Weltliteratur.	川 島 隆	(111)
Priska Pytlik: Okkultismus und Moderne.	熊 谷 哲 哉	(114)
Marek Nekula und Walter Koschmal (Hrsg.): Juden zwischen Deutschen und Tschechen.	佐々木 茂 人	(117)

『研究報告』バックナンバー

第1号(1985)

- 大川 勇: ある深層の物語の読解 — ムージルの『特性のない男』研究のための序説
金子 孝吉: リルケの詩『偶像』について
田辺 玲子: 関係世界の創出 — アネッテ・フォン・ドロステ=ヒュルスホフの詩人像とその世界
奥田 敏広: トーマス・マンの「モンタージュ技法」について — 小説形式のパロディー

第2号(1986)

- 松村 朋彦: 心理学と小説のあいだ — カール・フィリップ・モーリッツ『アントン・ライザー』とその周辺
大川 勇: 千年王国を越えて — ムージルの『特性のない男』における〈別の状態〉の行方
加藤 丈雄: 『公子ホムブルク』について — 死の恐怖とその超越を中心に
奥田 敏広: リオン・フォイヒトヴァンガーの小説『成功』におけるヒトラー像について — 20年代の証言の一つとして

第3号(1988)

- 加藤 丈雄: ハッピーエンドと悲劇 — 『公子ホムブルク』の多義性について
兵頭 俊樹: ヘルダーリンの‘Wie wenn am Feiertage...’に現れるディオニュソスの形象をめぐって
竹本 まや: トーマス・マンの『すげかえられた首』試論
友田 和秀: 『魔の山』試論 — 主人公ハンス・カストルプの形姿をめぐって

第4号(1990)

- 津田 保夫: 『ヴァレンシュタイン』試論 — ネメシスの悲劇の観点から

- 千田 春彦: フライダンの『ベシヤイデンハイト』研究のために — 三つの『はざま』をてがかりとして
宮田 眞治: 覚醒へ向けての夢想 — 『ハインリッヒ・フォン・オフターディンゲン』試論(1)
千田 まや: トーマス・マンの『ファウストゥス博士』 — デューラーの機能についての一考察
斎藤 昌人: 一カフカ像 — 『流刑地にて』をめぐって

第5号(1991)

- 青地 伯水: ホーフマンスタールの『厄介な男』における「なおざりにされた生」と「達成された社会性」
谷口 栄一: C. F. マイアーの『ユルク・イエナツチュ』について — その多義性に関する一考察
津田 保夫: 後期シラーの悲劇論に関する一考察 — 悲劇的恐怖の概念を中心に
斎藤 昌人: 閉ざされる世界

第6号(1993)

- 片桐 智明: ヨーゼフ・ロートの『ラデツキー行進曲』 — 「比較」と「繰り返し」のモチーフをめぐって
千田 春彦: デア・シュトリッカーの『閉じ込められた女房』について — 物語の重層構造の目指すもの
福田 覚: 自然模倣説における真理媒介の構造(1) — レッシング〈詩学〉に潜在する模倣説の輪郭
青地 伯水: W. ヒルデスハイマーの『リープローゼ・レゲンデン』におけるグロテスクなものについての一考察

第7号(1994)

飛鳥井 雅友: 「しばしばそれは絶望的な対話
なのです」 — パウル・ツェラーンにおける
対話の概念をめぐる

吉田 孝夫: 時間の渦 — R・M・リルケ『新詩
集』の数篇から

片桐 智明: ヨーゼフ・ロートの『右と左』 — 二
つの方向

第8号(1995)

濱中 春: シラーの『マリア・ストゥアルト』 — 二
人の女王のドラマ

中村 直子: 分離動詞の認定をめぐる諸問題

飛鳥井 雅友: 神学の拒否と詩学 — パウル・
ツェラーンにおける神義論の問題

第9号(1996)

中村 直子: 正書法と分離動詞

濱中 春: シラーの『ヴィルヘルム・テル』におけ
るスイスの風景

片桐 智明: ヨーゼフ・ロートの『百日天
下』 — ヨーゼフ・ロートのワーテルロー

飛鳥井 雅友: 「胸は張り裂け」 — ゴットフリー
ト・ベンの場合

第10号(1997)

濱中 春: シラーの『逍遥』における風景をめ
ぐる — 風景の補償モデルとその矛盾

吉田 孝夫: ローベルト・ヴァルザーにおける寓
話性(1) — 散文小品『通り(I)』について

片桐 智明: 物語の行方 — ヨーゼフ・ロートの
『果てしない逃走』と『カプツィン派教会納骨
堂』をめぐる

第11号(1998)

吉田 孝夫: ローベルト・ヴァルザーにおける寓
話性(2) — 放蕩息子をめぐる二つの散文
小品について

片岡 宜行: ドイツ語の与格の分類について

國重 裕: クリスタ・ヴォルフ『クリスタ・T への追
想』について — その語りの構造

飛鳥井 雅友: ゴットフリート・ベンにおける〈抒
情的自我〉概念の登場をめぐる

第12号(1999)

片岡 宜行: ドイツ語の与格と空間補足語につ
いて

吉田 孝夫: ローベルト・ヴァルザーの絵画描写
について — エクブラシスの観点から

片桐 智明: ハイミート・フォン・ドーデラー四十
歳の小説 — 『最後の冒険』、騎士とドラゴ
ンの小説

KUNISHIGE Yutaka (國重 裕): Zwischen
Phantasiewelt und Wirklichkeit —
Essay über Ilse Aichingers „Die
größere Hoffnung“.

第13号(1999)

KUNIEDA Naotaka (國枝 尚隆): *Wilhelm
Tell als ästhetisches Projekt.*

吉田 孝夫: ローベルト・ヴァルザーにおける通
俗小説とメルヘンの再話について — 対
句法に関する試論

第14号(2000)

廣川 智貴: 文体論の理論と実践 — クライス
トの『ロカルノの女乞食』を例にして

佐々木 茂人: カフカの作品における歌のモ
ティーフ — 『歌姫ヨゼフィーネ、あるいは
ネズミ族』を中心に

國重 裕: オーストリア小説に見る《家族ドラマ》
の変遷 — M.シュトレールヴィッツ『誘惑。』
(1996)

第 15号(2001)

- 伊藤 白：『ブデンブローク家の人々』試論 — 「市民と芸術家」の生み出す四つの類型から
- 池田 晋也：アルトゥール・シュニッツラーの『自由への道』 — 市民的なものと芸術的なもののあいだを浮遊する生
- 川島 隆：カフカの息子たち — 短篇「十一人の息子」読解
- 中原 香織：ヘルマン・ヘッセの『シッダールタ』について — 葛藤の不在がもたらす問題をめぐって
- 羽坂 知恵：日常の「ヒーロー」 — ハインリヒ・ベルの『道化師の意見』について

第 16号(2002)

- 佐々木 茂人：東方ユダヤ人難民とブラハのユダヤ人 — カフカの伝記研究のために
- 川島 隆：「こいつは途方もない偽善者だ」 — カフカの中国・中国人像
- 國重 裕：ユーゴスラヴィア内戦をめぐる西欧知識人の応酬 — ペーター・ハントケ『冬の旅』に対する議論を中心に

第 17号(2003)

- 池田 晋也：描かれた劇場 — シュニッツラーの短篇『侯爵様御臨席』
- 伊藤 白：ゼゼミ・ヴァイヒプロート — 『ブデンブローク家の人々』における女性像とキリスト教
- 川島 隆：ユダヤ人と中国人 — カフカにおける人種と性愛をめぐって
- 武田 良材：クラウド・マンの『メフィスト』 — ドイツ反ファシズム運動の失敗の反映として

第 18号(2004)

- 廣川 智貴：主語の文体論 — クライストの『決闘』を中心にして
- 熊谷 哲哉：言葉をめぐるたたかい — シュレーバーと雑音の世界

ASAI Maho (浅井麻帆)：Sehen im Wörterverbindungsraum bei Rainer Maria Rilke — Eine Wandlung vom Sehen hin zur Rose

- 川島 隆：『万里の長城』における「男性」と「労働」の位置 — カフカのシオニズム理解を手がかりに
- 伊藤 白：白いドレスのロッテ — トーマス・マン『ワイマールのロッテ』における女性像
- 武田 良材：道徳的な女たらし — ヘルマン・ケステン文学のモラリスト像
- 國重 裕：現代文学は「歴史」を語りうるか？ — Katrin Askan (1966~) に見るDDR 文学の現在
- 書評・文献紹介

第 19号(2005)

- 青木 三陽：手紙を書く騎士 — 『パルツィヴァール』における「学識」と「書物」の意味について
- 樋口 梨々子：文学創作への萌芽としての音楽美学 — E.T.A.ホフマンの短編『ドン・ファン』試論
- 寺井 紘子：ホーフマンスタール文学における生と絵画
- 浅井 麻帆：ウィーン分離派館とヨーゼフ・マリア・オルブリヒ — 時代と分離派が求めた合目的性
- 熊谷 哲哉：結び目としての神経 — シュレーバーにおける宇宙と身体
- 池田 あいの：手紙論としての手紙 — カフカの恋文をめぐって
- 伊藤 白：ショーシャ夫人は美しいか — トーマス・マン『魔の山』における女性像と「東」
- 池田 晋也：ジャズアレンジされるヨーロッパ — ハンス・ヤノヴィッツの小説『ジャズ』
- 武田 良材：モラリストへの成長 — ヘルマン・ケステン文学のモラリスト像 その二
- 書評・文献紹介

INHALT

AOKI Sanyo :

Literatur zwischen Fiktion und Geschichte

— Über Wolframs Quellenberufung (1)

HIGUCHI Ririko :

E.T.A.Hoffmanns Ansichten über „Alte und neue Kirchenmusik“

und sein Konzept des „Romantischen“ (19)

ITO Mashiro :

Fräulein Engelhart

— Frauenbild und „Homosexualität“ im *Zauberberg* (33)

HIROKAWA Kaori :

Hally Hallers schmerzende Beine

— Über die Darstellung des Körpers in Hermann Hesses „Der Steppenwolf“ (55)

IKEDA Shinya :

Unterschiedliche Formen der Literarisierung von Jazz

— Bruno Frank und Felix Dörmann (73)

TAKEDA Yoshiki :

Das revolutionäre Wesen von Moralisten

— Moralisten in der Literatur Hermann Kestens (3) (93)

Rezensionen (111)

研究報告 第 20 号

非売品

2006 年 11 月発行

発行所 京都大学大学院独文研究室 研究報告 刊行会

〒606-8501 京都市左京区吉田本町

京都大学文学部内

郵便振替 01060-2-38520

印刷所 北斗プリント社

〒606-0864 京都市左京区下鴨高木町 38-2